新しいコレクション

二十代堆朱楊成《彫漆硯箱 玄鶴》

二十代堆朱楊成（1880-1952）
《彫漆硯箱 玄鶴》

1944年
漆、彫漆、蒔絵
高さ6.3, 幅24.5, 奥行26.5cm
平成25年度購入
撮影：アローアートワークス

咲きほこる菊の花を背景に、どこかコミカルな面持ちの鶴が三羽たたずんでいます。これらのモチーフは、漆を塗り重ねた厚い層を彫刻刀で彫って文様を表現する彫漆という技法であらわされています。彫漆には、単色を塗り重ねて濃淡を出す技法と、二色以上を塗り重ねて色彩豊かな模様を作り出す技法がありますが、本作は後者にあたり、彫られた断面に地層のような色の層があらわれるところも見どころのひとつとなっています。

下地に黄色味をおびた朱漆、図案化された菊花は濃密な赤の朱漆、葉や花柄には黒の漆面を出して、彫り下げる色漆の層をコントロールながらモチーフを巧みに表現しています。鶴の部分は、最上部の黒漆の層を彫り出し、頭部から羽根先にかけて色漆を塗り分けて銀粉を蒔き、肉付けされたボディに静かな陰影をあたえています。そしてくちばし部分をじっくり見ると、鼻孔やぺろりと突き出すような舌までもが朱漆の層まで丹念に彫り出され、さらには目やくちばしの先端だけに金蒔絵を施すという手の込みようです。また蓋裏と身の内側には荒めの金粉地に流水波が研出蒔絵で描かれており、彫漆を主に蒔絵の手法を併用した作品となっています。

彫漆は、中国・唐時代に技術が始まり、日本へは鎌倉時代にその作品が伝わりました。室町時代に堆朱彫（朱漆のみを塗り重ねて文様を彫ったもの）を模倣制作した初代楊成は、その出来栄えの良さを賞賛され、以来代々堆朱楊成を名乗って彫漆を家業としました。しかしその制作は、明治に至る約五〇〇年の間、中国からの渡来品を模倣するだけにとどまっていました。

作者の二十代堆朱楊成（一八八〇―一九五二）は、漆の世界に入った少年時代より渡来品の模倣を嫌い作品のオリジナリティを重視して、形状や意匠図案等すべて独自の発想と方法で制作することにこだわりました。本作のような彫漆と蒔絵の併用は、それまでの漆工芸には見られなかったもので二十代ならではの作品といえます。彫技だけではなく蒔絵や沈金、螺鈿等も自分のものとして技法の修練に励み、新たな表現手法をつぎつぎに試みた二十代は、堆朱家伝来の技をさらに洗練させながら、彫漆による表現の可能性を切り開いていきました。

最後にもう一度モチーフに目をむけてみましょう。本作は一九四四年、第二次大戦が激しさを増す中で制作されました。鶴は長寿や幸福の意味をもち、菊は日本のシンボルとして用いられますが、時代文化を咀嚼して制作に取り組んでいた二十代がこの硯箱にあらわしたモチーフには、幸せな日本の未来を願う思いがこめられているようにも感じられます。

（工芸課客員研究員　内藤裕子）